

X-18

自然
と
印象





言

○ 數名の友人が閑に任して思ひ附いた極めて無意味な集りである。ラファエル前派、シユワープ派、バルナシアン、ホーフマンスタールの新詩社などが或るムーブメントを意味して起つたもの

○ 非賣品だから奥附の必要はあるまいと云ふので何等の符牒を

命けない筈であつたが日本の法律は其れを許さぬ、出版法條例に違犯する者は罪を課せられるこの事である。で余義なく嚴めし相に「自由詩社」と呼びこの小冊子に「自然と印象」と云ふ名を附した。

○ たゞへ余義なくにしる、この二個の名を選んだところに多少詩



作上の態度を黙語して居るかの如く考へられる。要するに「眞面目に詩を作つて見たい」と云ふに外ならぬ。この小冊子は僕等が努力の一部を発表する貧しき機関である。

○編輯の他一切の事柄は主唱者たる夕咲君朽葉君の勞を待つ事にした。作物發表には何等の規定を設けず、只だ新作の出来た人から出すと云ふ風になるなら毎月一集百五十部宛を出版して今後二ヶ年間位は繼續したいと云ふ希望を持つ。

○この小冊子は唯だ讀んでもらい度いと思ふ人へのみ寄贈しやうぢやないかと云ふ事になつてゐる。

明治四十二年五月五日

人見東明



月光と少女

(新作六篇)

福田夕咲

灰 白

痺れた官能の……
灰白の
窓を洩れる光線。

……
強烈なほひと
しなやかなぬくもり
……

ウイスキーの
琥珀いろの世界に
いのちは溶けてゆくらしい。

ツワイライト

ほろほろこ
花散る
うつろなる心の奥の
夕暮の
ツワイライトに……。

女の肌のぬくもりのやうな

やはらかい風

うつろなる心の奥へ

吹きおくる、淡い淡いにほひを

花の……メランコリーの……

ああ、うつろなる心の奥の

うらさみしいツワイライトに

ほろほろと

花散る……

ほのかに

漂ふメランコリー。

唇

唇の

火の渦

眩く。

火の渦

しだいに

心を巻きこめる。

ああ
神経に魅入る
くれないの魔睡。

火の渦

エレキ

蛭

たましひが

吸ひつけられる——。

壘

乳房の

ふつくらした硝子壘

蜜淋酒の黄金の液のころめき。

洩れてくる、甘い甘いにほひ

身も、たましひも

細口の壘の裡へ溶け入るやうな。

ふご……

唇を吸ひ合ふひびき——

密語と、隠し笑ひと……

疲れた神経のうつらうつら
ごろろめく蜜淋酒の唄
ほのかな、ほのかな黄金いろの合唱。

女の血

真紅な薔薇の花

……女の血

神経が焼け爛れる。

ベンチ

アーク燈の青い溜息
疲れた神経のふるへ

樂堂の邊から

樹立を透してさ迷ふてゐるやうな樂の音いろ。

ああ、うすじろい音いろと

波のうねりをうつやうな

はかないやうな合唱。

青い青いアーク燈の光の中に
疲れ果てた神経がただよう――

ああ、消えてゆく合唱、樂の音いろ。

水銀の花蔭 (新作四篇) 三 富 朽 葉

顫 律

倦怠、倦怠

夜、日に、

絶えず麻痺して働く意識の。

心苦しく、懶い連続。

消え失せる日々

自分の思が浮動して、

色彩褪せ、

にをひ薄れ、

音の顫ひ微れるときにも、

笑も涙も

再び内に花と咲かぬときにも、

黙つて、黙つて……

鐵鎖の夢が曳摺る

重い無言。

暗い空気に錆び行く

わが傷。

午睡の枕元に、
さみしいものゝ絶えず
降り注ぎ、閃めく……。

青い死水、
光りのなげき、
静けさ籠り行く
一室一室のけ疎さ。

何時も眼の上にくづれて、
生命に纏はる死のくるめき、

永久に、永久に、
乏しさ、
貧しさ、
死に行く肉體を廻る
感覚の、活きた顫慄！

水のほとり

水の邊に零れる
響ない眞晝の樹魂。

物のおもひの降り注ぐ

はてしなさ。

充ちて消え行く
もだしの應へ。

水のほごりに生もなく死もなく、

聲ない歌、

書かれぬ詩、

何れか美しからぬ自らがあらう？

偶々過ぎる人の姿、
獸のかけ、

夫は皆遠くへ行くのだ。

色、

香、

光、

永遠に續くなか。

残 餘

むなし、

夕暮の思ひ。

風は、幽い旅に疲れ、

森に

樹々の葉の影を拾つて
佗しい夢の巢を捜す。

水の上に漂よつた白鳥よ、

死ぬる地平の一すぢに

なは何時しか

朽ち行く如く吸はれて……

ものの文めぐり

全い沈黙の底に絶え入る、

そを見れば、そを見れば……

接吻の唇の響して、

額に喰入りし

白い指の冷たさ……

隠れて行く眠りよ、

何故不意に二人はめざめた？

静かに充ちて行く
夕暮の中。

盡きせぬ霧の面にまつはる

むなしい思の

刹那刹那に

顫ふ魂の悲鳴！

遠く、永く

むなしい思をする故に

寂しさまさる悲しみ。

長 嘯

「私は眠ります」

敷石に落散る死んだ葉と

細い、温い雨……………

やがて、青く疲れる街燈。

鋭い憂愁は窓を廻つて

近く彷徨へど、

圓かな女の夢は

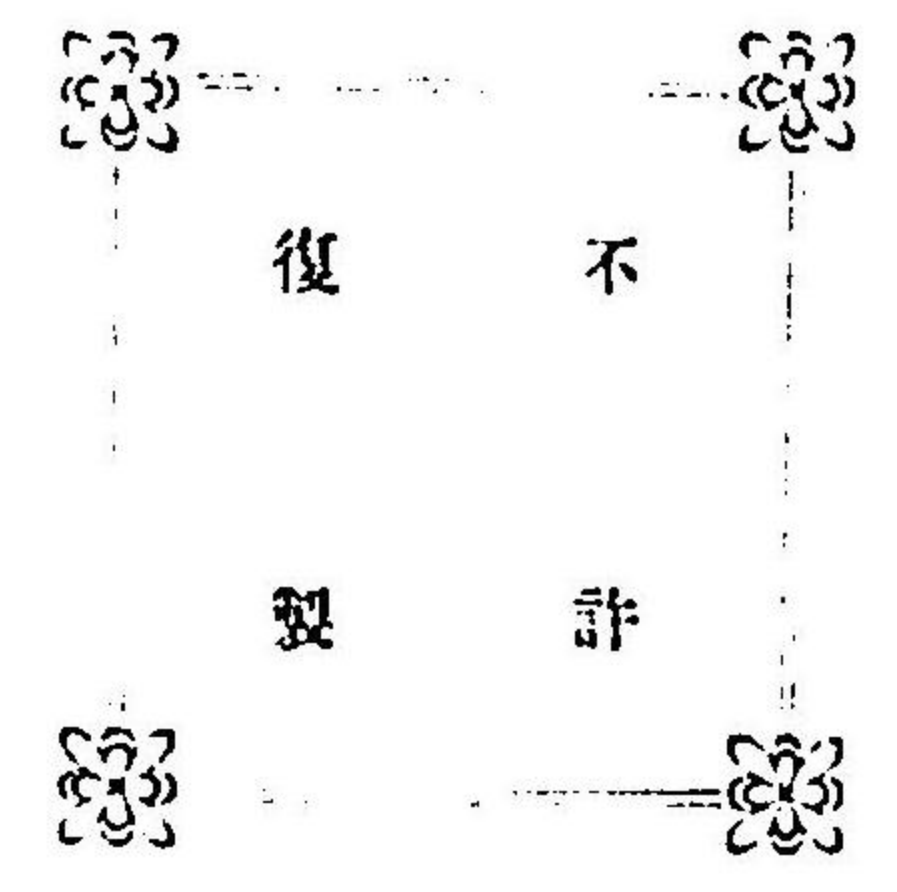
醒めもせず、静かに眠り行く。

259
298

幽かな夜の光り、
曇つたひと室に
蔽はぬ夢融け、
終夜の歌の零れ……………

聞くに由ないそれに
繋がれて、
濡れ濡れて、
涙は繁に、
玻璃の霜に泣く！

明治四十二年五月八日印刷
明治四十二年五月十日發行



發行所 東京市牛込區築土前町三十一番地
自由詩社

編輯兼發行人 東京市小石川區小日向壘町一丁目四十八番地
福田有作

印刷所 東京市小石川區小日向壘町三丁目四十三番地
大日本慈善協會活版部

印刷人 東京市小石川區小日向壘町三丁目四十三番地
佐伯外美雄

自然と印象
(六月集)

南國の春 (新作五篇) 加藤介春

微笑める少女 (新作四篇) 今井夏明

自然と印象 (No.2)

自由詩社

259
391



絶望の歌 (新作三篇)
加藤介春



斷層の上のゆふ暮れ

ただびろい斷層面の一つ、

その上を大膽にあざやかにゆふ日が照す。

投げつけられたやうな色である、さらめく。

所々に大きな高い木が見える。

その木には光もなく弾力も無い。

脱のやうな木である。

遙か向ふに白壁の家がある、

悲しみがある。

その悲しみはゆふ日で赤くなつて居る。

一端に崖がある。

針金のやうにして居る。

其所へ凡てが光も音も悲しみも押流される。

地上にはまた、赤い大きな斑がある。

斑には上を覆ふものも無い。

踏んで見給へ——音のしそうな血、光。

濃厚なゆふ日の色、

何となく危険な光が暫時、

断層面の上を斜めにてらすこ

影は影に重り、悲しみは悲しみに重る。

生ぬるい風が吹く。

(心の奥へ——方向なしに)

そしてゆふ日に照されて、

立木は重い隋力で動く。

不愉快な空の色——

重い光がてらして居る。

崖の上は刺されて

断層面には悲しみがさまようて居る。

ストーブの前

夜の室のストーブのあたたかさ、

溶けるぬくもり

強烈な刺戟の爲めに、

吾等二人は全身を絶えず動す。

暖爐の光が大膽に漸次に

吾等の皮膚を興奮させる、
皮膚がああ赤味さす迄。

白い手が人知れずしづかに
私の觸感を吸ふ。

寝らぬやうにと叫く。

二三時間のここである

そして吾等は、

凡てを知りつつ驚き恐れる。

全身の重い隋力で、

苦痛の爲めに、

彼れの眼はふるふて居る。

くれなるが投げつけられた。

強烈なぬくもりを抱いて

心がゆらめく

酔ひざれの様に――

一端に
盲動的に

すべてが
集る

くれなるの刺戟の爲めに、
くらい室で
暖爐の明りをたよりにして、
心と心がうなづく迄。

彼れに與ふる絶望の歌

あの夜
吾等はともし火を消して泣いた、

心と心が行き會ふて泣いた
くらい室で——うれが別れさなつて居る。

あのあくる朝、
汝は赤い眼をして居たが、
私は海へ、

——船のやうに——

くらい室のわかれ、
それを汝は無意味と泣いた。
しかし吾等は、

明るい所でわかれ得やうか。

心と心が漸々行き會ふ

殊にくらい室で——暖爐のあたたかさで——

そして別れる、

そのとき凡ての感覺があつまり嘆く。

私は今、

光や色と同じやうな

壁のこごウ井スキイのこと接吻のこと——

それらの意味を考へて居る。

崖がある、

夜の濕りを帯びて居る。

重いしづくが流れて居る。

抱かれた心が引き込まれて行く。

強烈な酒

汝は酒を飲むなど泣いた、

しかし私は鵜呑みに飲む、

その味を知らずして飲む、
終夜酔ふ。

崖の上に哲學がある。

夜

絶望の讚美歌をしづかに讀め。

私は汝と再び會はれない。

唇の上に酒が流れる。

そして私は崖や壁に關係して居る、

悲惨な哲學を得んとして居る、

汝に抱かれてゐる時の様に——くらい室で。

悲しさの中にほゝえみし花 (新作三篇) 今井白楊

或夜のかなしさ

か弱きわが心

悲しさのまゝに微笑みて

しづかに黙す……

果てしなくなみだながる。

仄かに、ほのかに、

月影見ゆ。――

榕樹の梢の上

緑葉の波立つあたり、

青白き光みだる……

しづかなる歌きこゆ……

榕樹の葉かげ、

その幹を取巻きて、

ほゝ笑める、歌へる少年の一群……

あゝ若き聲、

清げにも波立ちかつ顫ふ……

音もなく、
唇浮ぶ……

無限の闇中、沈黙の世の彼方、
その一点に罌粟のごとく爛れ燃ゆ……
密に……ひそかに……
その影流れ来る、
唇——女の——紅き唇——

紅き世界だ！
緑の、青の……あゝ遂に紅き世界……だ……

紅、くれなる、炎の、
血の、

その中に、わが顔浮む。
黄色に濁りつかれし眼、
しづかに漂ふ。

あはれ頬笑む……

息詰む闇の一室の底に
眠りの臥床——

暴風雨の、海の、擾亂の、
青浪狂ひ揺るとこごとく
波立ち、波立ち、かつなみだつ。

悲しかなしわが身、
果てしなく沈みゆく……(四月八日作)

黄昏

聖げにもやわらかな大氣の光、
透明なる青き空、
あほげば月のしづかに目醒め、

圓かなたもひ充ちゆく夜よ。

白ちやけた青藍色の高臺の

その中の森の影から

ほゝえめる赤き灯――

窓際の若樹の

ひこ葉、ひこはの

ほのかにもか弱きためいき……

しづかに白きたもひこもれど、
籠もりしまゝに動かざる、

慕はしき、この天地のひととき——

言なくてわがこころ、

たゞ首垂る、——それは墓の如し。——

頬笑みと云ひ、はた悲しみと云ふ、

それ等教ひしもの悉消え去りて昔にひゞく。
かすかにひゞく。——

いらざる月影ながれ來り、
目にも見え來る世の姿や——(四月五日作)

深夜

眺めさびしき樹立の上
青白き月しづかにかゝる。

ものゝ音も聞えず、

濕るめる、おぐらき微風の

あるごも無きおとづれ、

圓かにもこゝろ悲し。

月影に濡れし梢の

かすかにも切なる見震ひ、
追憶のかなしき調べ。……

降りそぐ無量の、

哀惜、

あれど、はやこゝろ憂し。

頼もしきものに思へど

あほげは月は静かにかゝるのみ。

うるほへる、冷たき光、

海ごもわが身を繞りつゝむ。

なに者も、

こゝろ無し！

あはれたゞ、深夜の奥に潜める

仄暗さうまひの床の上、

移りゆく、移り來る時も知らずに

かくてあれ倦んぜし胸よ！ 四月六日作

259
391

不許
復製

明治四十二年六月八日印刷
明治四十二年六月十日發行

發行所 東京市牛込區築土前町三十一番地
自由詩社

編輯兼發行人 東京市小石川區小日向壘町一丁目四十八番地
福田有作

印刷所 東京市小石川區小日向壘町三丁目四十三番地
八洲舍

印刷人 東京市小石川區小日向壘町三丁目四十三番地
佐伯外美雄



自然と印象 (第三集)

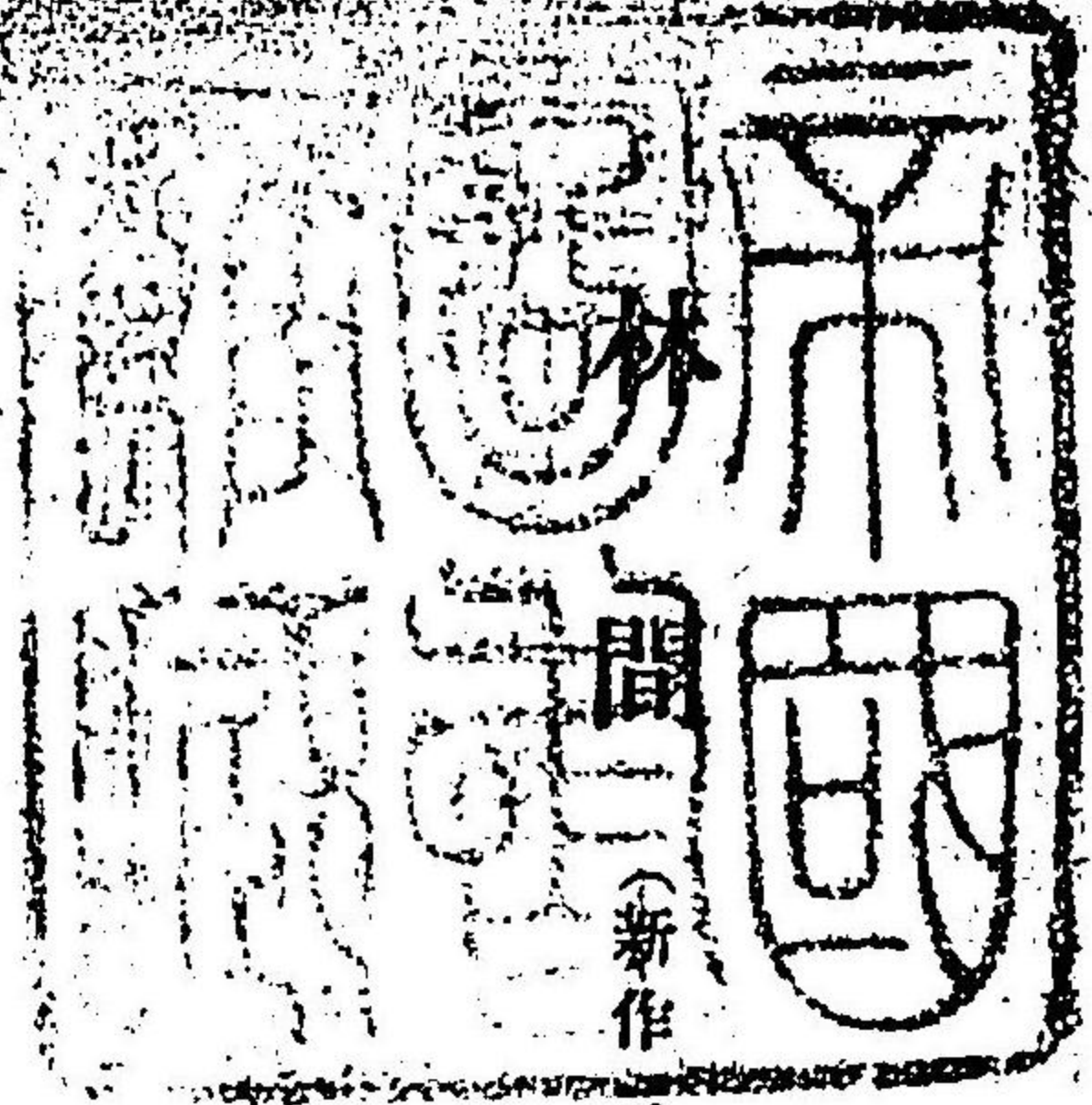
自然と印象 (七月集)

苺を盛れる皿 (新作五篇) 人見東明

湖上に漂ふ藻 (新作五篇) 福田夕咲

自由詩社

259
497



聞
三
（新作三篇）

人
見
東
明



湖畔の一夜

淡緑林の片ほどり
みづみづしい初夏の夕暮れ
青白い壁を
黄昏が這ふてゐる——蟲のやうに——

往き來ふ小蒸氣船の
甲板の上にとゞ獨り、
——湖上には清新な畫が——
透いて見えるのは何にであらう？

かの湖畔のゆふべ
若木立
節氣ない病院の窓……
もの寂しい灯の情緒が
水のほごりに浮いてゐる。

うちうち顛ふ情操よ
おもひでの
みだるる時に……

湖畔の柔かい夕べ

舟の上

寂しい藻の花が流れてゐるのに
もの静かな夜のさま。

笛の音のゆたかな表情の

咽び、

すすり泣き、

沈んで行くやうな愁ひの唄の
漸弱の奏律よ……

淡緑林の片ほこり

あわあわしい空を流れる

白い夜の雲

鳴いて行く鳥の愁ひが

顫へつゝ一條の……

何年の後迄でも

木立は「夏」を描いてゐるけれど

敗滅の跡

したたるやうな緑蔭の

朱塔の上、
白々と明けゆく朝晴れの
麗はしい大氣のひかり。

梢上に
白い旗がある。

朝風ぎに搏めく

空の上、

流れてゐる雲の、

淡緑林の、

數旒よ

もの悲しげに破れてゐる。

飽き果てる迄で

聞き給へ

人々の子孫等よ！

欲しいままに。

断え間ない
赤裸々の悲哀を……

生々しい土の匂ひ
林間の新しい墓の底から
断え間ない
法権黨の邪淫の憂愁を……

あはれ、あはれ
押韻してゐる哀愁のゆくへ——
蜂の羽音
降り頻る霧の白
木葉のそよぎが静に聞えてゐる。

山麓の哀歌

葉がくれに唄ふ
瀧の歌の
大夏のまひる
眩しい光線を浴び乍ら。

見よ、見よ、
水沫に濡れる
谷間の苔の花の白さ——
蔭には不安な畫が漂ふてゐる

羽音静かな
五月蠅の群が
瀧壺のあたりを舞いつつ――

たちまち――降りそそぐ

光線の

眼まぐるしさよ

青水無月の

山麓のまひる

日ざしに刺される

嬌かしいくれなゐの

――とある日のまひる

崖の上を――

巡禮の少女は何所へ行くのだらう？

喘いでゐる様な空

光線と水沫とが降りそそぐ

葉がぐれに唄ふ

瀧の歌

山麓さんろくのまひる
 緑蔭りよくゐんの寝椅子ねいすの上に
 静寂せいじやくな哀歌あいかを聞いてゐる。

緑の世界 (新作七篇)

福田夕咲

緑の世界

五月雨の晴れ間の
果しない青空に消えゆく鳥のかけよ。

野の草原の天鷲絨
ふたりの胸は溶け合ふ……

緑の世界――

ふたりのたましひの合唱が
のびやかに、ゆるかに流れる。

岸

青く、ほがらかに、うら寂しい月光よ、
ひろびろした水面の……
悲しい夢に溶けてゆく。

静寂の夜のにほひ、
輪廓はうすれうすれて
ねむれる湖畔の柳。

水面を啼きすぎる

ほのかなる鳥の歌、
陰は月光にかくれて……。

ああ、東の間のいのちは
緑色の空想の底に沈む……。

硝子窓

樹立がくれの硝子窓、
憂ひにくもるその面――
壁を埋める青葛の繁げり。

水面の無言――

ほのめく水草の白い花びら
漂ふにほひのうら寂しさ。

鎖された窓、

ほほゑめる白い花びら……
こころの底の――
なめらかな憂愁の歌がもれ聞へる。

月夜の境内

溢れ……

溢れてやまぬ銅蓮の水の白さ、
海底のやうな静けさ
晝よりも明るい……

しかも、うら寂しい夜のいろ。

寺院の屋根は銀のやうに輝く――
洞穴のやうな御堂の
ひややかに、ほのめく佛のほひ。

梟鳴く……

けむりのやうな、空ろな聲の。

晝よりも明るい……

しかも、うら寂しい夜のいろ。

溢れ、……

溢れてやまぬ銅蓮の水の白さ。

五月雨の窓

女性のやうな五月雨。

胡弓を擦るらしい

憐あはれつばい聲こゑの震ふるへ—
 さんよりした臘ろういろの眼めのうるみ、
 けれど、際まは立つてあざやかに
 唇くちびるばかり燃もえてゐる。

五月さみ雨だれよ、

泣なくやうを汝おまへの歌うたを聞ききながら
 洞ほら穴あなのやうな汝おまへの胸むねに抱いだかれて
 静しずかに唾つば眠りに落おちゆく……

その軟しなやかな寂さみしさの……

心こゝろゆくばかりなつかしい

乳ちいろの石いし階か

乳ちいろの石いし階かを
 忍しのび足あしして……

うす曇くもる月つきの夜よの
 おぼろげなる花はな園ぞの—
 軟しなやかな花はなのにほひ
 溶とけるやうな甘あまいさみしさ。

静かな花辨の夢のふるへこ
深夜のやわらかいメロデー……。

乳いろの石階を
忍び足して……

たましひは君の室へ――。

水銀のやうな水面

水銀のやうな水面を
たましひと笛の音いろこ
もつれつつ、迷ふてゆくやうな……。

女は啜泣く。

水成岩を斜に照す月。

うちつづく濱邊の砂の白さ、
果もない青黒い松の林。

波の上を漂ふ笛の音いろ、
遣るせない跡をひいて……。

女は啜泣く。

259

497

不許
復製

明治四十二年七月八日印刷
明治四十二年七月十日發行

發行所 東京市牛込區築土前町三十一番地
自由詩社

編輯兼發行人 東京市小石川區小日向窪町三丁目四十八番地
福田有作

印刷所 東京市小石川區小日向窪町三丁目四十三番地
八洲舍

印刷人 東京市小石川區小日向窪町三丁目四十三番地
佐伯外美雄

X-18

象 印 七 然 日

(集 月 八)

午睡の歌 (新作五篇)

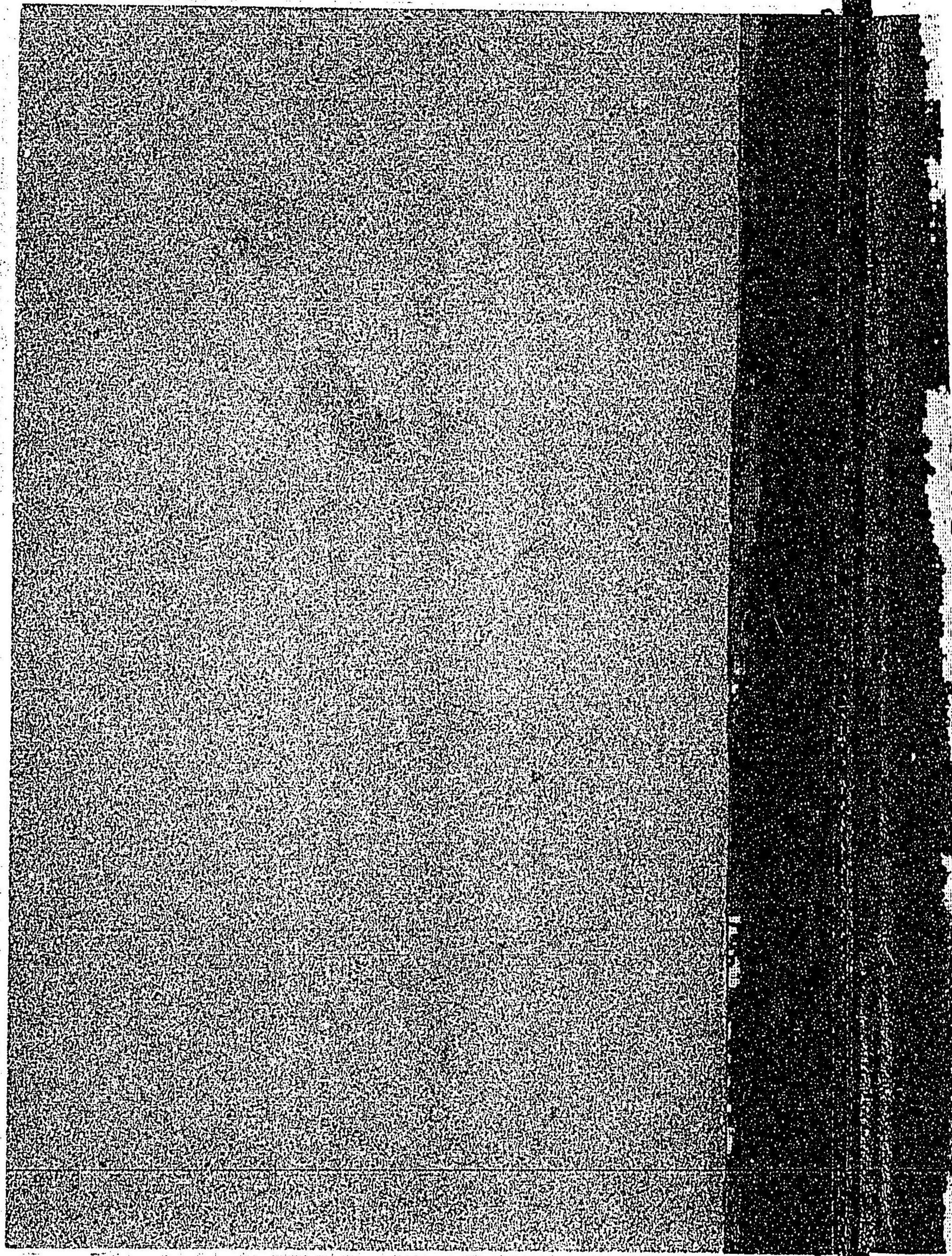
三富 朽葉

悲しき人々の (新作三篇)

加藤 介春

團體

自 由
詩 社



52
8

自然と印象

国立国会図書館

087971-000-2

特52-288

自然と印象

自由詩社

M42

DBG-0061



